科 目 名	看護学概論		履修年次	1 年次
科目区分	専門分野	単 位 数（時 間）	1 単位（ 15 時間）	
講 師 名		講師の実務経験の有無	有	無

目 的:
看護の主要概念の理解を深め、保健・医療・福祉システムにおける看護の機能と役割の理解を深める。
目 標:
1 看護の概念と看護の構成要素(主要概念)を理解できる。
2 看護理論家と提唱した理論の概要を理解できる。
3 サービスとしての看護と経済のしくみを理解できる。
4 看護職の倫理を理解できる。

授 業 計 画

単 元	時 間	内 容	方 法
1 看護の概念	2	1 看護の定義 （1）看護理論家による看護の定義 ア F・ナイチンゲール　イ V・ヘンダーソン （2）看護職能団体による看護の定義 ア ICN の定義　イ 日本看護協会の定義 （3）看護の構成要素 2 看護の役割と機能 (1)看護ケア ア「ケア」の語源　イ ケアとケアリング (2)看護実践と質の保障に必要な要件 ア 芸術としての看護　イ 個別的看護 ウ 看護の質の保障に欠かせない要件 (3)看護の役割・機能の拡大	講義 GW
2 人間と環境・健康	2	1 人間の「暮らし」と環境 （1）生活者としての人間 （2）家族・集団・地域 2 人間の「からだ」「こころ」と環境の関連 （1）人体の構造と機能・病態生理 （2）環境が健康に及ぼす影響 （3）ホメオスタシス （4）適応機制 3 健康の定義 （1）WHO の定義 （2）社会の変遷と健康観の変化 （3）健康の概念と位置づけの変化	講義 GW
3 看護実践を支える理論	4	1 看護理論の意義 2 看護理論の概要と実践への活用 （1） ニード理論 ： V・ヘンダーソン （2）人間相互作用理論 ：H・ペプロウ　J・トラベルビー （3） システム理論 ： S・C・ロイ （4）セルフケア理論 ： D・E・オレム （5）ケアリング理論 ： J・ワトソン　P・ベナー	講義 GW

4　看護と経済しくみ	2	1 サービスとしての看護 2 看護サービスと経済のしくみ （1）医療保険制度と診療報酬 （2）介護保険制度と介護報酬 （3）看護サービスの評価	講義
5 看護倫理	4	1 職業倫理としての看護倫理 （1）職業倫理 （2）法的責任と看護倫理 （3）わが国の看護倫理への取り組み ア 看護師の倫理規定 イ 看護職の倫理綱領 2 看護実践における倫理問題への取り組み （1）看護の本質としての看護倫理 （2）医療をめぐる倫理原則とケアの倫理 （3）倫理的葛藤と対応 （4）倫理的態度 （5）倫理的課題に取り組むしくみ	講義 GW
試験	1		
評価方法	筆記試験 演習前後の課題の内容 課題の提出状況 GW への参加姿勢 総合的に評価する。		
必須資料 （テキスト）	系統看護学講座　専門分野　基礎看護学①　看護学概論（医学書院） 『看護覚え書』第7版（現代社） 看護職の基本的責務　2023 版（日本看護協会出版会）		
参考資料	・授業資料は適宜印刷のうえ、配布する。		
履修上の 留意事項	・准看課程での学習を基本として、積み上げる学習のため、既修学習内容を復習のうえ、授業に臨むこと。 ・GW には自己学習のうえ、積極的に参加姿勢で臨むこと。（他者との意見交換をとおして、自己の価値観や考え方を広げるよう努めること。）		

科 目 名	看護共通基本技術Ⅰ（感染予防・ﾌｨｼﾞｶﾙｱｾｽﾒﾝﾄ）		履修年次	1 年次
科目区分	専門分野	単 位 数（時 間）	1 単位（ 30 時間）	
講 師 名		講師の実務経験の有無	有 ・ 無	

目 的:
看護実践に共通する安全確保と感染予防の技術及びフィジカルアセスメント技術を習得する。
目 標:
1 看護における安全を守るための方法を理解できる。
2 感染防止に必要な知識と基本技術を習得できる。
3 フィジカルアセスメント技術を確実に習得できる。

授 業 計 画

単 元	時 間	内 容	方 法
1 安全を守る技術	2	1 看護における安全の意義 2 環境の意義 （1）人間と環境 （2）療養生活における環境 3 療養環境のアセスメント 4 環境調整の援助技術	講義
2 感染を予防する技術	12 （6）	1 感染予防における看護師の責務 2 感染防止の意義 （1）感染成立の条件 （2）院内感染防止 3 標準予防策 ＜スタンダードプリコーション＞ （1）手指衛生（衛生学的手洗い） （2）個人防護用具 （3）患者に使用した器具・リネン （4）環境対策 4 感染経路別予防策 （1）接触予防策 （2）飛沫予防策 （3）空気予防策 5 洗浄・消毒・滅菌 6 無菌操作 （1）保管方法 （2）滅菌物の取り扱い（滅菌バッグ・包装の開き方・取り出し方） （3）鉗子・鑷子の取り扱い （4） 手袋・エプロンの着脱 （5）滅菌手袋・滅菌ガウン・ゴーグルの着脱 7 感染性廃棄物の取り扱いと感染拡大防止の対応 （1）感染性廃棄物の判断基準 （2）感染性廃棄物の分別・表示 （3）感染性廃棄物取り扱いの注意点 （4） 感染拡大防止対策	講義
	（2）	衛生学的手洗い、手指衛生（擦式アルコール消毒剤での手指消毒）	演習
	（4）	個人防護具の着脱、 無菌操作・滅菌物の取り扱い	演習

2 フィジカルアセスメント技術	15 （4）	バイタルサインの測定とｱｾｽﾒﾝﾄ	演習 技術練習
	（4）	胸腹部のﾌｨｼﾞｶﾙｱｾｽﾒﾝﾄ ： 腹部の聴診・打診 胸部の聴診（呼吸音の聴診・心音の聴診）	演習 技術練習
	（4）	筋・骨格系のﾌｨｼﾞｶﾙｱｾｽﾒﾝﾄ 感覚器・神経系のﾌｨｼﾞｶﾙｱｾｽﾒﾝﾄ	演習 技術練習
	（3）	身体計測技術とｱｾｽﾒﾝﾄ	演習 技術練習
試験	1		

評価方法	筆記試験 技術チェック 演習の参加姿勢 レポートの提出状況・内容 総合的に評価する。
必須資料 （テキスト）	系統看護学講座　専門分野　基礎看護学②　基礎看護技術Ⅰ（医学書院） 系統看護学講座　専門分野　基礎看護学③　基礎看護技術Ⅱ（医学書院） 学生のためのヒヤリハットに学ぶ看護技術（医学書院） 根拠と事故防止からみた基礎・臨床看護技術　第2版（医学書院）
参考資料	・授業資料は適宜印刷のうえ、配布する。
履修上の 留意事項	・看護の領域に共通する基本的な技術を学習する。予習のうえ、授業には積極的な学習姿勢を望む。 ・感染予防の演習は、技術を確実に習得できるように、テキスト・授業資料等を熟読し、積極的・主体的な参加姿勢を望む。 ・授業のあとは復習しておくこと。 ・フィジカルアセスメント技術演習は、准看護師課程で学習した技術と、解剖生理学で学習した「フィジカルアセスメント技術」を、根拠をもって確実に習得できるよう、くり返しの練習が可能となるように設定している。各自が主体的・積極的に演習・技術練習に臨むこと。 ・また、解剖生理学で演習した内容を十分に復習のうえ、授業に臨むこと。

科 目 名	看護共通基本技術Ⅱ（コミュニケーション技術）		履修年次	1 年次
科目区分	専門分野	単 位 数（時 間）	1 単位（ 30 時間）	
講 師 名		講師の実務経験の有無	有 ・ 無	

目 的:
看護実践に共通するコミュニケーション技術と医療チームの一員としてのコミュニケーション技法を習得する。

目 標:
1 看護におけるコミュニケーションの意義と方法を理解できる。
2 援助関係を促進するためのプロセスレコードの意義と実際を習得できる。
3 医療チームの一員としてのコミュニケーション技法を理解できる。

授 業 計 画

単 元	時 間	内 容	方 法
1 コミュニケーション技術	15 （7）	1 コミュニケーションの概念 2 コミュニケーションの過程に影響する因子 （1）自己が持つ相手への認識 （2）表現技術の巧拙 （3）場の雰囲気 （4）関係者の心的状態や人格特性 3 効果的なコミュニケーション技法 （1）意図の明快さ （2）傾聴、共感、受容 （3）沈黙の意味合いと対応 （4）質問法 4 人間対人間の関係を確立するプロセス （1）初期の出会いの位相 （2）同一性の出現の位相 （3）共感の位相 （4）同感の位相 （5）ラポートの位相 5 コミュニケーション技術を高めるための方法 （1）看護場面の再構成 ： プロセスレコード （2）ロールプレイ 6 コミュニケーションに障害のある人への対応 （1）失語症、構音障害 （2）伝音・感音・神経伝達の障害 （3）認知症 （4）意識障害	講義 GW
	（8）	場面の再構成（プロセスレコード）	演習
2 チームコミュニケーション	14 （6）	1 チーム医療とコミュニケーション （1）チームワークとは （2）医療におけるチームワークの重要性 （3）チームビルド 2 医療スタッフ間のコミュニケーション （1）報告	講義

		（2）連絡 （3）相談 3 カンファレンス （1）カンファレンスの意義 （2）カンファレンスの構成メンバーと看護師の役割 （3）効果的なカンファレンスのために重要な事項 （4）アサーティブなコミュニケーション	
	（4）	連絡・報告・相談の実際	演習
	（4）	カンファレンスの実際	演習
試験	1		
評価方法	筆記試験 GW・演習の参加姿勢 演習前の事前学習レポート 演習後のリフレクションシート 課題の提出状況 総合的に評価する。		
必須資料 （テキスト）	系統看護学講座　専門分野　　基礎看護学②　基礎看護技術Ⅰ（医学書院） トラベルビー　人間対人間の看護（医学書院）		
参考資料	＜参考テキスト＞ 看護カンファレンス　第3版（医学書院） チーム医療論（医歯薬出版） ・授業資料は適宜印刷のうえ、配布する。		
履修上の 留意事項	・看護実践に必要かつ領域に共通する基本的な技術を学習する。予習のうえ、授業には積極的な学習姿勢を望む。 ・GW・演習は、技術を確実に習得できるように、テキスト・授業資料等を熟読し、積極的・主体的な参加姿勢を望む。 ・特にチームコミュニケーションは、実習でのカンファレンスや看護師としてチームの一員としてのコミュニケーション技術として重要な学習である。積極的な学習姿勢を望む。 ・授業のあとは復習しておくこと。		

科 目 名	看護共通基本技術Ⅲ（看護過程展開技術）		履修年次	1 年次
科目区分	専門分野	単 位 数（時 間）	1 単位（ 30 時間）	
講 師 名		講師の実務経験の有無	有 ・ 無	

目 的:
科学的思考に基づき、効果的かつ系統的に看護を展開する方法を習得する。
目 標:
1 看護過程の考え方と展開方法の基本を理解できる。
2 ゴードンの機能的健康パターンに基づく看護過程の展開方法を習得できる。
3 実践した看護を省察する意義を理解し、実際に実施した看護体験を省察できる。

授 業 計 画

単 元	時 間	内 容	方 法
1 看護過程の考え方と展開方法	6	1 看護過程とは 2 看護記録 （1） 記載・管理における留意点 （2） 看護記録の構成 （3） 看護記録の種類 ア 問題志向型看護記録（PONR） イ フォーカスチャーティング 3 看護過程の各段階 （1） アセスメント ア 情報収集 イ 情報の分析 （2） 看護問題の明確化（看護診断） ア 看護問題と看護診断 イ 看護問題の種類 ウ 看護問題の標記方法 エ 看護問題の優先順位 オ 共同問題 カ 看護問題リスト （3） 看護計画 ア 期待される成果（目標）の表記 イ 看護計画の立案 （4） 実施 （5）評価 ア 期待される成果（目標）の達成状態の判断 イ 達成状態に影響した要因の考察 ウ 看護問題の解決の判断 エ 要因の考察に基づく追加・修正	講義
2 看護過程の展開の実際	12	1 ゴードンの機能的健康パターンを使用し事例を用いて看護過程を行う。※ （1） アセスメント （2） 看護上の問題の明確化（看護診断） （3） 計画立案 （4） 実施	講義 演習 GW

3　省察の実際	11	（5）看護実践の評価 ※ ア 看護実践の要約 イ 期待する成果と対象の状態の照合 ウ 期待する成果の到達度の判断とその要因分析 エ 看護上の問題の解決状況の判断	講義 演習 GW
試験	1		
評価方法	筆記試験 レポートの提出状況・内容 演習・GW への参加姿勢 出席状況 総合的に評価する。		
必須資料 （テキスト）	系統看護学講座 専門分野 基礎看護学② 基礎看護技術Ⅰ（医学書院） 系統看護学講座 専門分野 基礎看護学③ 基礎看護技術Ⅱ（医学書院） 系統看護学講座 別巻 臨床検査（医学書院） 看護がみえる Vol④ 看護過程の展開 （メディックメディア） 看護診断ハンドブック 第11版（医学書院）		
参考資料	・授業資料は適宜印刷のうえ、配布する。		
履修上の留意事項	・看護実践に必要かつ共通する基本的な技術を学習する。予習のうえ、授業には積極的な学習姿勢を望む。 ・GW には、自己学習のうえ、積極的・主体的な参加姿勢を望む。 ・自分自身で「看護を考える」ことが重要な学習内容であるため、テキスト・授業資料等を熟読し、積極的・主体的に授業に臨むこと。 ・授業のあとは復習しておくこと。特に、基礎看護学実習や領域別看護過程Ⅰ・Ⅱの基礎となる必須の知識である。わからないところは、積極的に質問するなど、理解が深まるよう努めること。		

科 目 名	看護共通基本技術Ⅳ（臨床判断）		履修年次	1 年次
科目区分	専門分野	単 位 数（時 間）	1 単位（ 15 時間）	
講 師 名		講師の実務経験の有無	有 ・ 無	

目 的:
　看護師が考えるように考える能力:臨床判断能力の基礎的知識を理解するとともに、臨床判断能力の基礎を習得する。
目 標:
　1 看護過程との同一性と相違性を理解できる。
　2 臨床判断に必要な基礎的知識が理解できる。
　3 臨床判断の4つのフェーズを体験的に習得できる。

授 業 計 画

単 元	時 間	内 容	方 法
臨床判断の考え方と実際	14 （4）	1 臨床判断とは 2 臨床判断の4つの過程 （1）気づく （2）解釈する ア 直観的推論　イ 分析的推論　ウ 説話的推論 （3）反応する （4）省察する	講義 DVD 視聴
	（10）	3 臨床判断能力の体験的実践:事例をもとに展開する。 （1）気づく （2）解釈する （3）反応する （4）省察する	講義 演習 GW
試験	1		

評価方法	筆記試験 レポートの提出状況・内容 演習・GW への参加姿勢 出席状況 総合的に評価する。
必須資料 （テキスト）	系統看護学講座 専門分野 基礎看護学② 基礎看護技術Ⅰ （医学書院） 系統看護学講座 専門分野 基礎看護学③ 基礎看護技術Ⅱ （医学書院） 学生のためのヒヤリハットに学ぶ看護技術 （医学書院） 看護がみえる Vol. 4 看護過程の展開 （メディックメディア）
参考資料	臨床判断ティーチングメソッド （医学書院） 経過別成人看護学① 急性期看護:クリティカルケア（メヂカルフレンド社）
履修上の留意事項	・看護実践に必要かつ共通の基本的な技術を学習する。予習のうえ、授業には積極的な学習姿勢を望む。 ・演習・GWは、技術を習得できるように、テキスト・授業資料等を熟読し、積極的・主体的な参加姿勢を望む。 ・また「考えること」「考えたことを表現すること」「意見交換すること」をとおして、コミュニケーション技術も磨かれ、知識も深まる。積極的な学習姿勢で臨むこと。 ・授業のあとは復習しておくこと。

科 目 名	日常生活援助技術Ⅰ（食事・活動休息）		履修年次	1 年次
科目区分	専門分野	単 位 数（時 間）	1 単位（ 15 時間）	
講 師 名		講師の実務経験の有無	有 ・ 無	

目 的:
健康の保持・増進や疾病の予防、健康の回復にむけた日常生活援助技術を、対象の状態に合わせて実践する能力を習得する。

目 標:
1 人間にとっての日常生活の意義を理解できる。
2 日常生活援助の必要性を判断する視点を理解できる。
3 日常生活における援助方法を理解できる。
4 対象の状態に合わせて、日常生活援助技術を安全・安楽に実践する能力を習得できる。

授 業 計 画

単 元	時 間	内 容	方 法
1 食事と栄養の援助技術	6 （4）	1 食事の意義 2 摂食行動 3 消化吸収のメカニズム 4 栄養状態および食欲・摂食能力のアセスメント 5 健康障害時の食事 6 食事・栄養の援助 （1）「自分で食べる」ための援助 ア 配膳と食事介助 イ 摂食・嚥下訓練 （2） 経口的栄養摂取以外の栄養法 ア 経管栄養法 イ 中心静脈栄養法	講義
	（2）	経管栄養法	演習
2 活動・休息の援助技術	8 （4）	1 活動・運動の意義 2 良い姿勢とは 3 廃用症候群 4 良肢位 5 体位 （1） 基本体位 （2） 特殊体位 6 体位の保持（ポジショニング） 7 活動・運動の観察とアセスメント 8 活動・運動の援助 （1） ボディメカニクスと安楽な体位の変換 （2）移動 （3）移乗・移送 （4） 歩行の介助 9 睡眠の意義 （1） レム睡眠とノンレム睡眠 （2） 概日リズム（サーカディアンリズム） 10 睡眠障害の種類・要因	講義

		11　休息・睡眠の観察とアセスメント 12　休息・睡眠を促す援助 （1）睡眠パターンの調整：活動と休息のバランス （2）リラクセーション：リラクセーション法としての足浴	
	（4）	健康障害に応じた体位の変換・移動・移送や歩行の介助	演習
試験	1		
評価方法	筆記試験 技術演習の事前課題 技術演習終了後のリフレクションシート 課題の提出状況 演習・GW への参加姿勢 総合的に評価する。		
必須資料 （テキスト）	系統看護学講座　専門分野　基礎看護学③　基礎看護技術Ⅱ（医学書院） 根拠と事故防止からみた基礎・臨床看護技術　第2版（医学書院） 看護形態機能学　第4版（日本看護協会出版会）		
参考資料	・授業資料は適宜印刷のうえ、配布する。		
履修上の 留意事項	・看護の領域に共通する基本的な技術を学習する。予習のうえ、授業には積極的な学習姿勢を望む。 ・GW は、自己学習のうえ、積極的・主体的に参加すること。 ・演習は、複合的な技術習得を望む。そのため、自己学習のうえ、対象に対しての看護実践を考えて臨むこと。 ・さらも、看護技術は確実に習得できるように、テキスト・授業資料等を熟読し、積極的・主体的な参加姿勢を望む。 ・授業のあとは復習しておくこと。必要であれば技術を自己練習すること。		

科 目 名	日常生活援助技術Ⅱ（排泄・衣生活と清潔）		履修年次	1 年次
科目区分	専門分野	単 位 数（時 間）	1 単位（ 30 時間）	
講 師 名		講師の実務経験の有無	有 ・ 無	

目 的:
健康の保持・増進や疾病の予防、健康の回復にむけた日常生活援助技術を、対象の状態に合わせて実践できる能力を習得する。

目 標:
1 人間にとっての日常生活の意義を理解できる。
2 日常生活援助の必要性を判断する視点を理解できる。
3 日常生活における援助方法を理解できる。
4 対象の状態に合わせて、日常生活の援助を安全・安楽に実践する技術を習得できる。

授 業 計 画

単 元	時 間	内 容	方 法
1 排泄の援助技術	14 （8）	1 排泄の意義 2 排泄行動 3 排尿・排便の障害 4 排泄の観察とアセスメント 5 排泄の援助 （1） 自然な排泄への援助~~介助~~ （2） トイレ以外での場・方法での排泄の援助 ア ポータブルトイレを使用した援助 イ 床上での排泄の援助 ウ おむつを使用した援助 （3） 自然な排泄以外の排泄援助 ア 浣腸 イ 導尿	講義 GW
	（2）	浣腸	演習
	（4）	一時的導尿	演習
2 衣生活と清潔の援助技術	15 （7）	1 衣生活の意義 2 衣類交換の基準と衣服選択 （1） 病衣 （2） 履物 3 衣生活の観察とアセスメント 4 衣生活の援助 （1） 病衣・寝衣の交換 ア 和式寝衣におけるポイント イ パジャマにおけるポイント ウ 輸液ラインが入っている場合の寝衣交換のポイント 5 清潔の意義 6 清潔の観察とアセスメント 7 清潔を保つための日常行動とその障害 8 清潔の援助 （1） 全身の保清 ア 入浴・シャワー浴	講義

		イ 全身清拭 （2）部分保清 ア 洗髪 イ 手浴・足浴 ウ 陰部洗浄 エ 口腔ケア	
	（4）	対象に応じた全身清拭と寝衣交換	演習
	（4）	全身清拭と寝衣交換・陰部洗浄とおむつ交換	演習
試験	1		
評価方法	筆記試験 技術演習の事前課題 技術演習終了後のリフレクションシート 課題の提出状況 演習・GW への参加姿勢 } 総合的に評価する。		
必須資料 （テキスト）	系統看護学講座 専門分野 基礎看護学③ 基礎看護技術Ⅱ （医学書院） 根拠と事故防止からみた基礎・臨床看護技術 第2版（医学書院） 看護形態機能学 第4版（日本看護協会出版会）		
参考資料	・授業資料は適宜印刷のうえ、配布する。		
履修上の 留意事項	・看護の領域に共通する基本的な技術を学習する。予習のうえ、授業には積極的な学習姿勢を望む。 ・GW は、自己学習のうえ、積極的・主体的に参加すること。 ・演習は、複合的な技術習得を望む。そのため、自己学習のうえ、対象に対しての看護実践を考えて臨むこと。 ・さらも、看護技術は確実に習得できるように、テキスト・授業資料等を熟読し、積極的・主体的な参加姿勢を望む。 ・授業のあとは復習しておくこと。必要であれば技術を自己練習すること。		

科 目 名	診療の補助技術		履修年次	2 年次
科目区分	専門分野	単 位 数（時 間）	1 単位（ 15 時間）	
講 師 名		講師の実務経験の有無	有 ・ 無	

目 的:
対象が安全に検査や治療を受けられるように、診療の補助に関する基礎的知識・技術を習得する。
目 標:
1 診療の補助における看護の役割を理解し、安全・安楽な診療の補助技術を習得する。

授 業 計 画

単 元	時 間	内 容	方 法
1 診療の補助技術	14 （8）	1 診療に伴う看護技術 （1） 診療のプロセス （2） 診療における看護の役割 （3） 診察時の援助 2 検査に伴う看護技術 （1） 検査における看護師の役割 （2） 検査を受ける患者への援助 ア 検体検査と補助技術 イ 生体検査と補助技術 3 治療に伴う看護技術 （1） 呼吸・循環を整える技術 ア 吸入 (ｱ)酸素吸入 (ｲ)ネブライザー吸入 イ 吸引 (ｱ)一時的吸引:・口腔内・鼻腔内吸引 ・気管内吸引 (ｲ)持続的吸引:・胸腔ドレナージ ウ 生体情報のモニタリング (ｱ)心電図検査 (ｲ) 心電図モニター (ｳ)SPO_2モニター （2） 侵襲的処置の介助技術 ア 穿刺 (ｱ)胸腔穿刺 (ｲ)腹腔穿刺 (ｳ)腰椎穿刺 (ｴ) 骨髄穿刺 イ 胃洗浄の介助 （3） 創傷管理の技術 ア 創傷治癒過程 イ 創傷処置 (ｱ)創洗浄と創保護 (ｲ)包帯法 （4） 薬剤投与に伴う看護技術 ア 与薬における看護師の役割 イ 各与薬方法と看護(効果の観察) (ｱ)経口与薬 (ｲ)口腔内与薬 (ｳ)直腸内与薬 (ｴ)点眼・点入、点耳、点鼻 (ｵ)経皮的与薬 (ｶ)吸入 (ｷ)注射 静脈内注射・ （5） 輸血に伴う看護技術 ア 血液製剤の種類と管理(使用期限・保存方法) イ 血液製剤の投与に伴う ウ 血液製剤投与後の観察と副反応への対応	講義

	（3）	静脈血の採血	演習
	（3）	静脈内注射（ワンショット） 点滴静脈内注射（ミキシング・プライミング・穿刺・固定・滴下調整・残量計算）	演習
試験	1		
評価方法	筆記試験		
必須資料 （テキスト）	系統看護学講座　専門分野　基礎看護学②　基礎看護技術Ⅰ　（医学書院） 系統看護学講座　専門分野　基礎看護学③　基礎看護技術Ⅱ　（医学書院） 系統看護学講座　別巻　臨床検査　（医学書院） 根拠と事故防止からみた基礎・臨床看護技術　第2版　（医学書院）		
参考資料	・授業資料は適宜印刷のうえ、配布する。		
履修上の 留意事項	・看護の領域に共通する基本的な技術を学習する。予習のうえ、授業には積極的な学習姿勢を望む。 ・演習は、技術を確実に習得できるように、テキスト・授業資料等を熟読し、積極的・主体的な参加姿勢を望む。 ・授業のあとは復習しておくこと。		

科 目 名	健康状態別看護技術		履修年次	1 年次
科目区分	専門分野	単 位 数（時 間）	1 単位（ 30 時間）	
講 師 名		講師の実務経験の有無	有 ・ 無	

目 的:
対象の健康障害レベルや回復過程・治療の経過に応じた看護を理解する。
目 標:
1 健康障害・治療の経過に応じた対象の特徴と看護を理解できる。
2 対象の年齢特性に応じた治療経過に伴う看護を理解できる。

授 業 計 画

単 元	時 間	内 容	方 法
1 急性期の看護	6	1 急性期の定義 2 急性期における看護の特性 3 急性期にある患者・家族の特徴 （1）患者の身体的・心理的・社会的特徴 （2）家族の特徴 4 急性期治療の特徴と患者・家族への影響 （1）治療環境に対する反応 （2）患者を取り巻く家族・社会と看護 ア 意思決定支援 イ 急性期看護の倫理的側面 5 対象特性に応じた急性期看護 （1）小児 ア 急性期における子どもと家族の特徴 イ 子どものおもな事故・外傷：誤飲・溺水・熱傷 ウ 子どもの救急におけるトリアージ エ 生命維持・生体機能維持のための援助：一次救命処置 オ 子どもの急性期における家族への看護：意思決定支援 （2）高齢者 ア 高齢者における急性期の身体的・心理的・社会的特徴 イ 生命維持のための援助 ウ 患者・家族の意思決定支援	講義 GW
2 周術期の看護	8 （4）	1 周術期の定義 2 手術を受ける患者の特徴 3 周術期における看護師の役割 4 手術前の看護 （1）術前の看護の役割 （2）意思決定の支援 （3）手術に向けた身体的・精神的準備 （4）手術室への入室 5 手術中の看護 （1）安全な手術のための環境管理と看護 （2）麻酔導入時の援助 （3）手術体位の固定時の援助 （4）手術中の援助 （5）麻酔覚醒時の援助	講義 GW

		6 手術後の看護 （1）術直後のモニタリング：生体反応 （2）疼痛管理と創傷管理 （3）術後合併症の予防 （4）術後回復促進の援助 （5）退院に向けた援助 ア 退院調整 イ 機能訓練とセルフケア能力の獲得 ウ ボディイメージの変化に対する受容支援 7 対象特性に応じた周術期看護 （1）小児 ア 周術期の子どもと家族の特徴 イ 子どもと家族の術前準備 ウ 手術室及び回復室での看護 エ 術後急性期の子どもの特徴 オ 術中・術後の家族の看護 （2）高齢者 ア 手術を受ける高齢者の特徴 イ 術前の看護 ウ 術後の看護	
	（4）	術直後の観察	演習
3 回復期の看護	4	1 回復期・リハビリテーション期の定義 2 回復期における看護の特性 3 リハビリテーションの理解 （1）リハビリテーションの概念 （2）障害の構造 4 回復期にある患者・家族の特徴 （1）患者の身体的・心理的・社会的特徴 （2）家族の特徴 5 回復期にある患者への看護援助 （1）リハビリテーションの基本的アプローチ （2）日常生活動作・活動範囲拡大に向けた援助 （3）障害の受容と心理的葛藤への支援 （4）社会参加への支援 （5）家族の障害受容とソーシャルサポート 6 対象特性に応じたリハビリテーション期看護 （1）小児 ア 成長発達を考慮したリハビリテーション （2）高齢者 ア 疾患から生活への視点の転換 イ ADL の拡大 ウ アクシデントの予防 エ 退院に向けた支援と家族へのかかわり	講義 GW
4 慢性期の看護	4	1 慢性期の定義 2 慢性期の疾病経過の特徴 （1）疾病の特徴 （2）治療の特徴	

		3 慢性期にある患者・家族の特徴 （1） 患者の身体的・心理的・社会的特徴 （2） 家族の特徴 4 慢性期にある患者への看護援助 （1）慢性期患者の QOL （2）慢性期患者の生活支援 ア セルフケア能力と自己管理への支援 イ アドヒアランスや主体性の尊重 （3）慢性期の患者・家族の援助 ア 患者・家族の抱える問題 イ 退院調整と多職種連携 ウ 医療費助成制度の活用 5 対象特性に応じた慢性期看護 （1） 小児 ア 慢性期にある子どもと家族の特徴 イ 自己管理支援 ウ 家庭生活の支援 エ 社会生活の支援 （2） 高齢者 ア 生活習慣の改善 イ 複数の慢性疾患を抱えた高齢者の生活指導	講義 GW
5 終末期の看護	7	1 人間にとっての死 （1）生命活動の停止と死の判定 （2）脳死の定義 （3）キューブラー・ロスの死の受容過程 （4）死の受容過程への援助 （5）死にまつわる考え方 ア リビングウィル イ 尊厳死 ウ DNAR 2 終末期の定義 3 終末期ケアの3つの概念 （1）緩和ケア （2）ホスピスケア （3）ターミナルケア 4 終末期にある対象の療養の場 （1）一般病棟 （2）ホスピス （3）在宅 5 終末期にある対象への看護 （1）終末期にある対象の QOL （2）身体的苦痛の緩和 ア 終末期にある対象の身体的特徴 イ 身体症状に対する具体的援助 ウ 疼痛コントロールの実際 （3）精神的・社会的・霊的苦痛の緩和 ア 精神的・社会的・霊的苦痛の特徴	講義 GW

		イ 精神的・社会的苦痛に対する具体的援助 （4）家族への援助 ア 終末期にある対象の家族の特徴 イ 家族のニードと充足 ウ 予期的悲嘆への援助 エ 遺族ケアの提供 6 臨終・死亡時の援助 （1）臨終前・臨終間近の援助 （2）死後の援助 ア 死後の身体の変化 イ 死後ケア（エンゼルメイク） 7 対象特性に応じた終末期看護 （1）小児 ア 子どもの「いのち・死」のとらえ方と死に対する反応 イ 終末期にある子どもの身体的・心理的・社会的特徴 ウ 子どもを看取る家族の心理的特徴と反応 エ 子どもを亡くした家族への看護 （2）高齢者 ア 死のとらえ方 イ 末期段階における身体的変化とアセスメント ウ 家族への看護 （3）在宅療養者 ア 終末期の在宅療養者の身体的・心理的・社会的特徴 イ 在宅看取りと看護 ウ 介護者へのケア	
試験	1		
評価方法	筆記試験 GW や演習への参加姿勢 レポート 総合的に評価する。		
必須資料 （テキスト）	系統看護学講座 専門分野 基礎看護学④ 臨床看護総論（医学書院） 系統看護学講座 専門分野 老年看護学（医学書院） 系統看護学講座 専門分野 小児看護学① 小児看護学概論 小児臨床看護総論（医学書院） 系統看護学講座 別巻 臨床外科看護総論（医学書院）		
参考資料	・授業資料は適宜印刷のうえ、配布する。		
履修上の 留意事項	・看護の領域に共通する基本的な技術を学習する。予習のうえ、授業には積極的な学習姿勢を望む。 ・GW には主体的・積極的態度で臨むこと。 ・演習は、技術を確実に習得できるように、テキスト・授業資料等を熟読し、積極的・主体的な参加姿勢を望む。 ・授業のあとは復習しておくこと。 ・複数の講師が担当するので、出欠席は自己管理のうえ、欠席しないように授業に臨むこと。		